

満洲文字の文字表をめぐって(11)

—音価(1)：利用する諸文献—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

吉池：今回は、外国借音用の文字 ts' dz、ž、čy jy、母音 y について検討しました。

中村：前回まで10回にわたって、主に有圈点満文の文字の字形について議論をしました。今回から文字の音について議論するということでしたね。

どの時代の音を付すか

吉池：ところで、現代まで存続している言語の文字表記であるならば、文字の音は現代の標準的な発音を利用して付し、過去のある時点では、この音はこの様であった、たとえば済むのですが、満洲文字については、この点を、どのようにしましょう。

中村：満文の文字表は、過去に書かれた有圈点満文を読むためのものですから、有圈点満文が作られたとされる1632年、すなわち17世紀前半を想定して、その当時の音を設定するのが理想でしょう。もっとも、17世紀前半の音を設定するに足る資料があるか、ということが問題です。

満文中の借用漢語や満文の人名や地名を漢字音写した資料はあります。17世紀前半から後半にかけての満語と漢語の対音資料とされる資料としては「大清太祖武皇帝実録」(満文。1636年)と「大清太宗文皇帝実録」(漢文。告成は崇徳元年(1655)11月)があります。前者は、有圈点満文のなかの人名や地名や役職名などの漢語語彙を資料とすることができます。後者は、満文の人名や地名などを漢字で音写した部分を資料とすることができます。両者ともに体系的に満語音を記したものではないのですが、当時の満洲語文語の一端を知ることにはできるでしょう。

吉池：百年ほど下りますが、18世紀前半の資料として清・舞格著『滿漢字清文啓蒙』¹(雍正庚戌(1730)程明遠題)があります。これは満洲語文語の学習書で、有圈点満洲文字で書かれた満洲語の音節に対して、漢字音を注記した部分があります。この資料によれば、或る程度体系的に当時の音を想定することができます。この資料については、池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」²の研究があります。

¹ 拓殖大学図書館蔵本の複写を利用。

² 池上二郎(1986-1987)「滿漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察」『札幌大学女子短期大学部紀要』第8号(1986)、第9号(1987)、第10号(1987)。池上二郎(1999)『満洲語研究』

中村：『滿漢字清文啓蒙』（1730年題）を主なる資料として中心に据える。その上で、現代やその他の過去の資料を参考にする、ということでしょう。もっとも今回の議論では、17世紀前半の満文と漢語の対訳資料、ハングルと満文との対訳資料を入手して検討する時間はありません。これらについては今後の課題ということです。

諸文献の満洲文字の音

中村：まずは手近な研究文献や入門書などの満洲文字に、どのような音が付されているか確認しましょう。

吉池：手もとには、服部四郎(1937)「一資料」³、池上二郎(1955)「トゥングース語」⁴、河内良弘(1996)『文語文典』⁵があります。これによって一覧表を作り検討の材料にしたいと思います。なお少々煩わしいかもしれませんが服部四郎(1937)「一資料」のように論文名の一部を付して議論をすすめます。

中村：三つの文献に挙げる音は同質のものではありません。一覧表を出す前に、それぞれがどのようなものであるか確認しておきましょう。まず服部四郎(1937)「一資料」からです。

服部四郎(1937)「一資料」の表記音

吉池：服部四郎(1937)「一資料」は日本における満洲語音の研究の嚆矢とも言えるもので後代に少なからぬ影響を与えました。そこでやや詳しく言及することにします。

さて服部四郎(1937)「一資料」は、昭和10年(1935)に行われた調査に基づくものです。五つの種族において行なわれている満洲語の音読法の調査資料(以下“調査資料”とする)に対して、解説を付して公表したものです。ミョルレンドルフ(=メレンドルフ。服部氏の表記)のローマ字の下、満文十二字頭の第一字頭(単母音と、子音+単母音)の綴りの読音を記録し表を作ったものです。母音を例として挙げると次のとおりです。

ミョルレンドルフ(1)満洲人	(2)新バルガ人	(3)新バルガ人(ハルハ方言)	(4)ダグール人	(5)ソロン人
a	a	a	a	a
e	ə	ə	ə	ə

61-181頁、東京：汲古書院所収による。

³ 服部四郎(1937)「満洲語音韻史の爲めの一資料」『音聲の研究』第6輯、279-294頁。『服部四郎論文集第一巻 アルタイ諸言語の研究 I』三省堂、1986年、68-86頁、所収。

⁴ 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社 462頁-464頁に掲載された文字表の音価。昭和61年(1986)第12版による。

⁵ 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覺羅 烏拉熙春 両氏。

i	i	i	i	i	i
o	ò	o	ó	o	o
u	u	ù	ù	u	u
ü	ò	ö	ö	o	ó

いうまでもなく(1)満洲人を使用します。インフォーマントは「新疆の惠遠城出身の満洲人玉聞精一氏 (Gwalgiea [姓] Veczinggha [名]) の發音を滿洲里に於て觀察した。」(282頁) とのことです。

中村：19年後の服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」⁶は新疆省伊犁地方の錫伯(シボ、シベ)族出身者の口語の音韻を調査したのですが、そのインフォーマントも、たしか玉聞精一氏でした。

吉池：両者は同一人物なので、服部四郎(1937)「一資料」の読音の気になる個所は、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の口語音によって確認することができます。もっとも、前者は、教育の場で教え込まれた読音が反映し、後者の生きた口語音とは音形において異なる場合はあるでしょう。しかし、音質という面では、一人の人間が読音と口語音の質を異なるものとして記憶するのは困難ですから大きな差はないとみています。

中村：玉聞精一氏の言語環境はどのようなものでしょう。

玉聞氏の言語環境

吉池：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の「まえがき」をみると概略次のとおりです。

- ①祖母及び父親の出身地は jaqəcuru (第8牛泉)
- ②母親の出身地は niuɣucuru (第6牛泉区)
- ③玉聞氏は jaqəcuru (第8牛泉) で生まれ、3歳から6歳まで母親の出身地 niuɣucuru (第6牛泉) に移り住んだ。
- ④その後6歳から12歳までは 'ujuniuru giaa (第1牛泉) にある jaqəcuru (第8牛泉) 出身の父の姉の家に住み、学校では標準語と見なされる niuɣucuru (第6牛泉) 方言を教えられた。
- ⑤その後、13歳から14歳まで jaqəcuru (第8牛泉) に住み、14歳から16歳までは、父の家族とともに 'ujuniuru giaa (第1牛泉) に住んだ。

⁶ 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30号、1-29頁。『服部四郎論文集第三卷 アルタイ諸言語の研究 III』三省堂、1989年、1-55頁、所収。

以上により、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、jaqəcuru (第8牛象) 方言が基層をなし、niugucuru (第6牛象) 方言が規範的方言として覆いかぶさっていると判断します。

中村：④の「6歳から12歳まで学校では標準語と見なされる niugucuru (第6牛象) 方言を教えられた」とあるこの方言を、上に覆いかぶさる規範的方言と見なすわけですから、第一字頭の読音は、この時期に学校で教え込まれた標準語の読音かもしれません。

吉池：たしかに④は、服部四郎(1937)「一資料」に記された読音にかかわる事項ですが、やや修正が必要です。

山本謙吾(1969)『基礎語彙集』⁷は、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の音韻分析に基づいて編んだ玉聞精一氏の口語の語彙集です。山本氏が他界した後に北村甫氏と大江孝男の編集を経て刊行されたものです。二人の編集者によって書かれた凡例中の「編集者ノート」によると、不明な点について玉聞氏に確認した旨が記されているから新たな情報が含まれています。それによると「玉聞氏は、はじめ(6歳から12歳の間)、恵遠城内の第1牛象地区在籍者居住区の父の姉の家に住み、そこで父の姉から満洲語の読み書きを主として寺子屋式教育方法で習ったが、」とあります。この記述によると、学校で標準語と見なされる niugucuru (第6牛象) 方言を習ったのではなく、「父の姉から満洲語の読み書きを主として寺子屋式教育方法で習った」とのことですから話は複雑です。

父の姉の出身地は、祖母及び父親と同じなので、jaqəcuru (第8牛象) 方言を話すと考えるのが穏当でしょう。その姉から niugucuru (第6牛象) 方言を習ったわけですから、父の姉も標準語として習った niugucuru (第6牛象) 方言を身につけていて、玉聞氏にその方言による読み書きを教えた、ということになります。服部四郎(1937)「一資料」の第一字頭の読みには、そのころ父の姉から習った満洲文字の読み方が反映しているとみて大過はないでしょう。

中村：寺子屋で使用した教材の情報がありますか。

吉池：残念ながらその点について特段の記述はありません。記述はありませんが、満洲語文語の学習書として『満漢字清文啓蒙』(1730年題)が一般に流布していたようなので、これに類するものであったかもしれません。この『満漢字清文啓蒙』の冒頭には満文十二字頭があり、発音の練習ができるようになっています。

資料の質：òの音をめぐって

⁷ 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所。

中村：先に挙げた五つの種族の満洲語の音読法ですが、(1)満洲語の o[ò]や u[ù]の[ò]は、どのような音声を意図した表記でしょう。五つの種族の音声は、(1)ò、(2)ɔ、(3)ɔ、(4)ɔ、(5)ɔです。これによると、[ò]は広目の[o]を表しているように見えます。

吉池：“調査資料”の、ò上の「`」も、ɔの上の「´」も、現在の国際音声字母の補助記号としては使用しません。おそらく「`」はフランス語の広めエ [ɛ] を表すアクサン・グラヴ (̀) を、「´」はフランス語の狭めエ [e] を表すアクサン・テギュール (´) を利用したのでしょうか。(1)ò、(2)ɔ、(3)ɔ、(4)ɔ、(5)ɔとなっているので、理屈の上では、o<ò<ɔ<ɔの順に調音位置が狭から広に移るとみるならば、整合性は取れます。

中村：そのように理解してよいならば、(1)のòは、“下より(広め)”の調音を示す補助記号「_」を付す [ɔ̲] で、(3)のɔは“上より(狭め)”の調音を示す補助記号「_」を付す [ɔ̄] となります。

吉池：しかし、話はそれほど単純ではありません。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：服部四郎(1937)「一資料」は、“調査資料”の [kã] [gã] [kò] [gò] に対して、次の解説を付します。

「満洲人の [kã] [gã] [kò] [gò] の破裂の生ずる位置は、夫々日本語の「カ」「ガ」「コ」「ゴ」のそれよりもやや前」(239頁)⁸

中村：“調査資料”の音 [ò] に対して、解説では [ɔ] を与えており、両者には異なりがあるように見えますね。

吉池：“調査資料”の調査が、昭和10年(1935)に行われたことは服部四郎(1937)「一資料」に次のように明記されています。

(満洲語の話者が)「昭和十年満洲里會議に通譯として出席してゐる事を海拉爾で知つたの

⁸ 池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」は、服部氏のこの解説を引用し「満洲人の [kã] [gã] [kò] [gò] の破裂の生ずる位置は、夫々日本語の「カ」「ガ」「コ」「ゴ」のそれよりもやや前。」(69頁)とする。この「ママ」であるが、[ɔ]を誤記と見なしているのか、それとも、整合性を欠いたように見える表記ではあるが、そのまま提示するという意味のいずれかであろう。

で（新聞記事による）早速出掛けて行つて、多忙中の所を隙を見て二三時間程懇談する事が出来た。」（282頁）

忙しい中での単時間の調査であったことは見て取れます。その調査によって得られた“調査資料”を利用して、解説を付した原稿が書かれ、服部四郎(1937)「一資料」として公にされたという次第です。

中村：“調査資料”の材料の作成と、それに解説を付した論文の公表との間には2年の隔りがありますね。

吉池：思うに、服部氏は、一度記した記録は後に恣意的に変更は加えないという方針をお持ちなのでしょう。“調査資料”には、調査当時の服部氏の“生の聴覚印象”を見て取ることができるとも言えます。

中村：結局のところ、調査時点での聴覚印象を記した“調査資料”の(1) [ɔ̃] を、[ɔ̃]（やや広い [o]）とすべきか、それとも [ɔ̃] とすべきか、ということについてはハッキリしないということですね。

服部四郎(1937)「一資料」から19年後に、同じインフォーマントによる服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」が出るわけですが、これによると、母音/o/に対する音声の簡略表記は [o] であり、その精密表記を [ɔ̃] とします。じっくり観察したならば、o は [ɔ̃] が適当であったということかもしれません。

吉池：服部四郎(1937)「一資料」の音は満文の第一字頭の読音です。この読音の“調査資料”は、比較的短時間で行われ、その場での聴覚印象を記したものであり、後の時間をかけて行われた調査結果とは異なる部分があるようです。そのような文献として服部四郎(1937)「一資料」を扱う必要があります。[ɔ̃] の音価以外にも幾つか腑に落ちない点があり、これについては後に言及します。

中村：次の文献、池上二郎(1955)「トゥングース語」の音は、どのようなものでしょう。

池上二郎(1955)「トゥングース語」の表記音

吉池：服部四郎(1937)「一資料」に依ったとのこと。池上二郎(1955)「トゥングース語」には次の記述があります。

「以下に各字母（の印刷體）とその發音及びメレンドルフ式翻字のローマ字を示す。（³）」（461頁）とあり、注記（3）には次のようにあります。

「服部四郎：満洲語音韻史の爲めの一資料（日本音聲學協會編「音聲の研究」6，東京，1937年，pp. 279-294）にみえる新疆地方の方言における十二字頭第一字頭の發音による。なほ子音字の發音はすべて母音字のまへにおける發音を示す。ü は k, g, h, のあとでは [u]，その他の場合は [o]，c, j はそれぞれ i のまへでは [tʃ, dʒ]，その他の場合は [tʂ, dʒ]。なほ精しくは原文参照。」（461 頁）

中村：服部四郎(1937)「一資料」に見られる特徴は、池上二郎(1955)「トゥングース語」に引き継がれているということですね。

吉池：そういうことです。その点は後に検討したいと思います。

中村：次は、最後の文献、河内良弘（1996）『文語文典』です。

河内良弘（1996）『文語文典』の表記音

吉池：河内良弘（1996）『文語文典』には、方針が異なる二種の音が並んでいます。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：河内良弘（1996）『文語文典』の一部をみると次のとおりです。

	基本音	変異音	文語音
ㄷ c	[tʂʰ]	[tʃʰ]	/tʃ/
ㄷ j	[tʂ]	[tʃ]	/dʒ/

中村：基本音と変異音はどのような関係にあるのか気になります。

吉池：同書の注記に、変異音は「母音字母 i の前に現れる．方言中の [tʃʰ] [tʃ] は常に前舌化母音の前に現れる．」とあります。基本音と変異音は、いわゆる“補い合う分布”となっています。

中村：基本音と変異音は、後続する狭母音の有無によって補い合う分布をしているので、これを音韻論的に解釈して表記するならば、/tʂʰ//tʂ/となります。ところが、文語音は /tʃ//dʒ/とします。

吉池：「方言中の [tʃʰ] [tʃ] は常に前舌化母音の前に現れる．」とあり、方言に言及する

ことから見て、[] が付された基本音と変異音は現代口語音でしょう。他方の文語音の /tʃ//dʒ/ は、過去のある時期の満洲語文語を想定して付したもので、口語音とは別の方針によって定められたものと理解することができます。

中村：音声であることを示す [] を付した基本音・変異音と、音韻であることを示す // を付した文語音との間には、直接の関係はないということですね。

吉池：そのようです。河内良弘(1996)『文語文典』を改訂版として、河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)⁹が刊行されていますが、改訂版は、/tʃ/と/dʒ/のように / / を付した文語音のみを採用します。ただし、音韻であることを示す / / は取り外し、音声であることを示す [] を利用して [tʃ] [dʒ] とします。河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)が、音韻を示す / / を取り外し [] を付して音声とした経緯はわかりませんが、音声とする処置はうなずけるものです。それは次の満文字母に対する音の表記からわかります。

	基本音	変異音	文語音
ㄐ	+a, o, ū [k]	[q]	/q/
ㄑ	+a, o, ū [k]	[q]	/ɣ/ ([ɣ]=[g])
ㄒ	+a, o, ū [x]	[χ]	/χ/
ㄎ	+e, u, i [k]	[k]	/k/
ㄏ	+e, u, i [k]	[k]	/g/
ㄒ	+e, u, i [x]	[x]	/x/

中村：変異音の [k] [q] [χ] と [k] [k] [x] は、後続する母音の異なりにより互いに補い合っています。この音声の異なりを、音韻的に解釈したものが、基本音の [k] [k] [x] であるように見えます。それに対して、文語音の方は音韻というよりも音声としたほうが適っています。

吉池：その点ですが、つぎのような記述があります。

「上記三字母の表わす音価は、満洲語文語でそれぞれ [k] , [g] , [x] であった。固有満洲語では、a, o, ū の後続する k, g, h 三子音は、異音 (allophone) としてそれぞれ [q] , [ɣ] , [χ] であったため、外来音としての、つまり満洲語にない [ka] , [ko] (この子音は漢語音 [k] に由来する) や [ga] , [go] (同じく [k] に由来) 等々を写すためにダ

⁹ その序文に「旧版では発音編で発音に随分多くの説明を割いたが、新版では省くこととしました。」とある。

ハイが作ったのがこれら三字母である〔清瀨〕。」(58頁)

これによると〔q〕,〔γ〕,〔χ〕を異音(allophone)とするからには、/q//γ//χ/と/k//g//x/は、//に囲まれてはいるけれども音声と見ても差し支えはなさそうです。

中村：三つの文献についての確認はこれまでとして、先に、音を検討する具体的な作業の手順として、『満漢字清文啓蒙』(1730年題)を主なる材料として、現代などの資料を参考にするとしました。『満漢字清文啓蒙』という文献がどのようなものか確認しましょう。

『満漢字清文啓蒙』の諸版(第Ⅰ類と第Ⅱ類)

吉池：われわれは所謂第Ⅰ類の三槐堂版と、同じく竹越 孝(2016)¹⁰が第Ⅰ類とする「書肆不明」の版(書肆名があるはずの冒頭の葉が欠落)の複写を合わせ見ることにします¹¹。

中村：この二書は前回までの字形の検討のおりしばしば利用したものです。ところで、国立公文書館デジタルアーカイブによると二種の『満漢字清文啓蒙』を閲覧することができます。内閣文庫所蔵の二酉堂版と文盛堂版です。それぞれ第一字頭の冒頭の画像を出すと次のとおりです¹²。内容はだいぶ異なります。

¹⁰ 竹越 孝(2016)『満漢字清文啓蒙〔会話篇・文法篇〕一校本と索引』東京：好文出版。

¹¹ 両書ともに拓殖大学図書館所蔵。

¹² 画像の利用についてアーカイブには次のようにあります。「デジタル画像等の二次利用について 本デジタルアーカイブで提供するデジタル画像等(紙媒体やマイクロフィルムからデジタル化した資料画像、映画フィルムの映像・音声データ、電子公文書など)については、任意にご利用いただけます。」

二酉堂版と文盛堂版ですが、版本によりどのような違いがあるか確認しておきましょう。

吉池：『滿漢字清文啓蒙』の版本については池上二郎(1999)「滿洲語文献」¹³に記述があります。それに依ると『滿漢字清文啓蒙』には第Ⅰ類（二酉堂版、三槐堂版、文寶堂版、永魁齋・中和堂版）と第Ⅱ類（永魁齋・宏文閣版、永魁齋・文盛堂版、永魁齋・老二酉堂版）の二種があり、第Ⅱ類は第Ⅰ類より後のものとのことです。なお、画像の二酉堂版は、我々が使用する三槐堂版及び「書肆不明」の版とほぼ同様です。

中村：国立公文書館のデジタルアーカイブで見ることができるものは、一つが二酉堂版で第Ⅰ類、もう一つは文盛堂版で第Ⅱ類というわけですね。第Ⅱ類の漢字音注は、第Ⅰ類とだいぶ異なります。いま第Ⅰ類と第Ⅱ類の一部を並べ、現代北京語の音を付すと次のとおりです。

服部四郎 『滿漢字清文啓蒙』の第一字頭

(1937)	滿文	Ⅰ類音注	Ⅱ類音注
[ɑ]	a	阿昂[ɑŋ]呀[ia]切	阿[a]
[ə]	e	惡[ɣ]	額[ɣ]
[i]	i	衣[i]	伊[i]
[ò]	o	窩[uo]	鄂[ɣ]
[u]	u	屋[u]	烏[u]
[ò]	ū	窩[uo]	譌[ɣ]
[nɑ]	na	那囊[nɑŋ]呀[ia]切 ¹⁴	納[na]阿[a]
[nə]	ne	諾能[nəŋ]哦[ɣ]切	納[na]阿[ɣ]
[ni]	ni	呢[ni]	尼[ni]伊[i]
[nò]	no	挪奴[nu]窩[uo]切	難[nan]鄂[ɣ]
[nu]	nu	奴濃[nuŋ]屋[u]切	努[nu]烏[u]
[nò]	nū	挪奴[nu]窩[uo]切	儒[nuo]譌[ɣ]

現代北京語に [o] という発音はありません。恐らく『滿漢字清文啓蒙』の e と o と ū の漢字音注が綺麗に区別されていないのは、当時の漢語の音が現代北京語と同様に単母音 [o] が無かったため、漢字の注記に苦心したためでしょう。

吉池：第Ⅱ類の漢字音注と関わることとして、池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」に、次の

¹³ 池上二郎(1999)「ヨーロッパにある滿洲語文献について」『滿洲語研究』東京：汲古書院、359-385頁。『東洋學報』（1962, 1964年）に追記を付して所収。

¹⁴ 囊は、囊囊 [nɑŋ] の誤記もしくは俗字か。囊は『康熙字典』（中華書局1980年による）に見えない。

ような『御製増訂清文鑑』の十二字頭の紹介があります。

「御製増訂清文鑑の十二字頭においては、a, e, i, u に阿, 額, 伊, 烏を当て、さらに o, ū に対しても鄂, 諤を当ててゐる。額, 鄂, 諤の現代北京音は、それぞれ ê²; ê⁴, ao⁴; ê⁴である。これは各単字の音を一層忠実に表さうとする意図によるものとみられる。すなはち、各単字の相違は異なる漢字によって示すが、必ずしも満洲語の各字母にシナ語のそれぞれ異なる母音を当ててはみないとみられる。」(129 頁)

中村：これによると、第Ⅱ類の漢字音注は『御製増訂清文鑑』と同じようです。

吉池：『御製増訂清文鑑』は国立公文書館のデジタルアーカイブで見ることができます¹⁵。いま『滿漢字清文啓蒙』第Ⅱ類と『御製増訂清文鑑』の一部を並べ、現代北京語の音を付すと次のとおりです。なお『御製増訂清文鑑』には「乾隆三十六年【1771年、対談者】十二月二十四日」とあります。

服部四郎 (1937)	『滿漢字清文啓蒙』 Ⅱ類音注	『御製増訂清文鑑』
[a]	a 阿[a]	阿[a]
[ə]	e 額[ɣ]	額[ɣ]
[i]	i 伊[i]	伊[i]
[ò]	o 鄂[ɣ]	鄂[ɣ]
[u]	u 烏[u]	烏[u]
[ò]	ū 諤[ɣ]	諤[ɣ]
[na]	na 納[na]阿[a]	納[na]阿[a]
[nə]	ne 納[na]阿[ɣ]	納[na]額[ɣ] 【異なる】
[ni]	ni 尼[ni]伊[i]	尼[ni]伊[i]
[nò]	no 難[nan]鄂[ɣ]	難[nan]鄂[ɣ]
[nu]	nu 努[nu]烏[u]	努[nu]烏[u]
[nò]	nū 懦[nuo]諤[ɣ]	懦[nuo]諤[ɣ]

中村：異なる部分はありますが、両者の漢字音注はほぼ同様と言って良いのでしょうか。或いは、『滿漢字清文啓蒙』第Ⅱ類の漢字音注は、『御製増訂清文鑑』に依るものかもしれません。「御製」とあるのでこれは公的な刊行物です。比較的念入りに校訂がされているはずなので、第Ⅱ類の訂正に使えるかもしれません。

¹⁵ 同書は複数あるが、請求番号 278-0112 の 49 冊中の第 3 冊目に満文十二字頭と漢字音注がある。漢字音注のみで、単語や付記はない。

吉池：以上で音の検討に利用する諸文献の確認は済みました。次回は母音文字の音を検討しましょう。